誌「我觀」より拔し來る。

然し乍ら斯の如きは実に党利、地盤擁護の一銭性たるに過ぎざるものであつて選挙民の信望をかち得んとするが如きは、遂に一場の空夢たるに終るであろう。

六、民憲党は護産大衆の政党である、結党後茲に一年有半、僅かに北九州の一角に渦巻蟠踞すると雖不正と不義とに勇敢に抗爭し、民衆の為の利益を主張して捲む所を知らない、此処に同志又民衆党に吟慮して入党する者多く共鳴者相誘ふて既に其の数二千を数へんとして居る。

七、此度の補欠選挙の期迫るや民憲党から立候補を促すの呼び出方にあかり、之が為に中央委員会は決議して党本部執行委員米林長太郎君を其の候補者たる事に決定した。

八、當落は造賄を許さずとは言へ、制限選挙の下此の選挙地域に於て栗栖氏の当選は確実である。絶体的に有利にして我等に絶望的に不利なる事は何人も予想する事が出来る、唯我等の莫ふ所は惨敗し混濁する既成政党から可及的に中産階級を分離して之を我等の陣列に導き来る事にある、之は又来る可き総選挙に備へ新有權者への宣伝と党自からの一大訓練となるであろう。

更に無産大衆に浸潤しつゝある中産階級旧有權者の諸君が斯所として既成政党と如何程の絶縁を潔し得るかの試金石となるものである。

九、民憲党は今此の補欠選挙に死力を盡す事を決意した、敵も亦大にして味方は余りに微力である、我等は衷心から全日本の護産大衆諸君の声援と協力とを求めて止まない

悲壮極まる顧の当選、敢て強に豪壮を誇張して内外に声明する。

大正十五年九月廿三日　民憲党中央委員会

立候補宣言書

今日の日本は内憂と外患とを踵を接して、実に一大危機に遭遇して居る、島津支那に於ける日米の海軍極まりなき列強諸国の苦藤色を恐怖して、いつも苦渋に堂逆し日露の間、常に密雲濃霧低徊して、鳴呼中に死有を摸索する。

既成の不安と生活の脅威、人心の頽廃と思想の混濁はかの三百万円疑獄事件、復興局の疑獄、松島事件等の醜怪の事実曝露、騒擾発生と相待ち国民をも絶望に導き、遂に之を契つて干例の惨崖に突落さんとして居る。

不正不義、腐敗堕落なく国民なく、唯政權と党利とを奪守獲得する事に躍起たる者、之が現下日本の政治家と政党者流である。

朝野に三党交々非行を繰いて、而して自から傷手を蒙り奔命に疲かれて、始めて連帯責任を政事の具に供し来る、その心事の陋劣なるは、更に驚動する事の陰險なる寒ろ我等をして憫笑を禁ぜざらしめる。

友邦支那が、亜欧、亜闘、朋党に悩まされる事を指摘する者、いづくんぞ知らん、亜欧、亜闘、朋党の禍荒か一切を鼎直するもの是ぞ、日本の政党者流ではないか。

枢密院と支政委員会とは国民に何事を求めつゝあるか、彼等補弼の命を奉じて宮中に廟堂に居る、手を拱ぬいて、さしまねけば百千の高位高官立所に其の尊息を伺ふ、併も社会評論家も戒慎して口を噤む事が出来ない。

此処に実に陰忍有、もとより考行の徒、悉く頑迷固陋の輩、人心の推移と世情の変遷を知る能はずして、進歩向上を憎嫉